



Title	中世イスパニア語における不定詞の特殊な用法について
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1994, 18, p. 21-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93811
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世イスパニア語における不定詞の 特殊な用法について

中 岡 省 治

1. 序

中世イスパニア語には、現代イスパニア語と比較した場合、多くの興味ある現象が観察されるが、その中でも特に、不定詞を初め動詞非人称形が示す統語上の現象にもそれが現れてきている。例えば、文構成の要素として上位文に、動詞としての機能を保ち組み込まれた、不定詞、ヘルンディオと過去分詞の文法上の主語の位置が、これらの三要素に対して前置も後置も可能であった、という事実がある。これは、同じ場合に後置しか認めない近・現代語と対比的な現象といえる。そこで、以下に、上位文の主語などとは異なる独自の主語を伴う不定詞とその主語、を問題の中心として、中世イスパニア語でのいくつかの現象を考察してみたいと思う。

2. 不定詞とその主語の位置

2.1. 近・現代語の場合

上述したように、近・現代語では上位文に組込まれた不定詞、ヘルンディオ、過去分詞の文法主語は、それが上位文の主語と異なる場合には、それらの要素の直後に置かれて、それ独自の主語を示すことになっている。この点を、イスパニア・アカデミアは次のように述べている。その記述によれば、過去分詞の場合の微妙な揺れを除いては、動詞非人称形の主語はそれに後置される、という原則が成立していると見なしていいだろう。

El sujeto del infinitivo y el del verbo principal son diferentes: *Por no saber yo nada me sorprendieron*; (...). Cuando el sujeto del infinitivo está

expresado, suele colocarse detrás de él; p. ej.: *Al entrar el director, todos nos levantamos y le saludamos*; (...)^(註1).

El sujeto del gerundio absoluto va siempre detrás de él; p. ej.: *Estando yo presente, no cometerán esa tontería*; (...)^(註2).

En la lengua moderna, la frase absoluta se inicia ordinariamente por el participio o el adjetivo: *Oídos los reos, el juez dispuso ...*; (...). Este orden se invierte en algunas fórmulas breves y fijas que el uso ha conservado; p. ej.: *Esto dicho ...*, junto a *Dicho esto ...*, o en el refrán *Comida hecha, compañía deshecha*. Cuando el sujeto es un pronombre personal, puede ir antes o después del participio^(註3).

2.2. 中世語の場合

通時的な観察としては、次のような形でいくつかの記述がみられる。これによれば、上位文に組み込まれた不定詞節の主語は、節中の動詞に前置することも認められていた、ということになる。

El infinitivo puede tomar un sujeto en nominativo: (...); *Pienso éste no ser hombre, sino algún demonio (Lazarillo)*; *ser tú el ladrón claramente lo manifiestas (Patrañuelo)*; (...). Construcciones de esta clase se empleaban más en tiempos pasados que hoy en día. El sujeto se pospone en castellano moderno; *antiguamente*, se podía anteponer. (F. Hanssen)^(註4)

Como se ve en los ejemplos en lenguaje actual el sujeto sigue al infinitivo; en *lenguaje antiguo* se usaba también antepuesto y todavía puede encontrarse así en lenguaje literario: *Sentía su inquietud crecer*. (M. Moliner)^(註5)

このような記述に合致する中世語の現象としては、次のような場合を挙げることが出来る。いうまでもなく、この主語の位置についての現象は不定詞のみに限らず、ヘルンディオにもまた過去分詞にも当てはまる。

なお、以下の考察でその対象とした中世語の諸用例は、中世カスティリ

ア語の代表的な散文テキスト四点から抽出した。使用テキストは、Alfonso el Sabio, *Obras* (Taurus, Temas de España, 161), pp. 75-210; *Libro del Caballero Zifar* (Clásicos Castalia, 115), pp. 51-158; Alfonso Martínez de Toledo, *Arcipreste de Talavera o Corbacho* (Clásicos Castalia, 24), pp. 39-143; Fernando de Rojas, *La Celestina* (Clásicos Castellanos 20 y 23) である (なお、用例に付記した数字は当該テキストのページを示す)。

- (1) pues furto es dicho *tomar el onbre*, o usurpar, o contractar la cosa agena contra voluntad de su señor. (Corbacho 111)
- (2) como sea notorio e cierto *los amantes* aquella fin *amar* para su apetito e defrenada voluntad conplir (Id. 97)
- (3) Fue luego la muger a dezir al enamorado, (...), *estando él* poniendo su tienda e sus espadas colgando... (Id. 94)
- (4) que, *vista ferosa muger*, que non la cobdicie e su poderío non faga por la aver e alcançar. (Id. 101)

2.3. 中世語の特徴—主語を伴う不定詞

このような中世語の全般的な傾向を確認したうえで、次は問題を不定詞に限って、特にその主語に言及しつつ、考察を続けることにする。

不定詞が上位文の一要素となって機能するのは、別段めずらしいことではない。これは近・現代語にも頻繁に記録される現象であるが、主格あるいはそれに等しい文法的な格をもつと考えられる名詞や代名詞を伴い、不定詞が文中に現れ、名詞節や副詞節と同等の働きをする場合は、中世語のほうがはるかに多かったといえよう。具体的には、次のような用例によって中世語の不定詞の特殊な用法を確認できる。

- (5) Seráte, santo padre, por grand yerro tenido, / *tú entrar* en tal cena, *yo fincar* desffamnido. (S. Lorenzo, 67) ^(註6)
- (6) (...) quiere alguno contra la voluntad de Dios obrar, venir, e vivir, perdiendo, come dixe, lo que te es por El prometydo syn lo *tú meresçer*, e esto por derramamiento de su propia sangre. (Corbacho, 48)

- (7) La mujer ser sobervia, común regla es dello. (Id. 155)
 (8) He probado *mi signo ser atal* ... (LibroBA., 154) ^(註7)
 (9) (...), en los quales ninguna cosa non se fallava cometida que de delicto fuese, (...), salvo que predicavan *aver seydo nascido un Christo*. (LLEM.) ^(註8)

2.4. 近・現代語の場合

上位文の主語や不定詞の主語としても解釈できる補語などとは異なる、独自の主語を伴い現れる不定詞は、近・現代語においては、次の三種の場合に大別できるであろう。

- (10) ¡*Casarse tu hermano* con la hija de Fulgencio! (M. Molho) ^(註9)
 (11) Al *ponerse el Sol*, la sombra crece. (M. Seco) ^(註10)
 (12) El decirlo *tú* me da confianza. (M. Moliner)
 (13) La policía afirmó haber sido *tú* culpable. (山口)

ここで(10)―(13)までの4文について簡単なコメントを加えるとすれば、次のようなことがいえるであろう。

(10)は、不定詞が本来的にもつ「従属節」としての働きを表面上は示さず、独立的に用いられている。このような場合、不定詞は、意味形成上必要とされる基本的な情報の「動作の時」「その動作の主体」を、それ独自では提示しえない。そこで、それを明確にするためには、どうしても不定詞が現れる文脈そのものに依存して、必要とされる情報を補う必要が生じてくる。その意味では、この場合の不定詞は、文脈依存型、としてその機能を分類することが出来る。

(11)は近・現代語にも一般的に広く用いられる副詞的機能の不定詞節で、(10)の場合ほどではないが、やはり独立的な性格をその特徴としている。接続詞で書き換えた場合、主節の動詞の支配を受けるのは[時制]の素性に関する部分のみであり、[叙法]の素性については、その意味の支配を受け

ることではない、といえるであろう。

(12), (13)は、名詞的機能の不定詞節であり、文の構成要素として完全に上位文中に組み込まれている場合である。主語であれ補語であれ、[時制]と[叙法]の二素性にわたって主動詞の直接の支配を受ける場合、と定義出来るであろう。

また近・現代語では、このような形での独自の主語を伴う不定詞節の使用については、節中の主語の位置以外に、主語が代名詞か語彙的名詞か、節が上位文の主語に立つ場合にはそれが主動詞に前置されるか否か、また上位文の直接補語となる不定詞節ではそれが単純形か複合形か、などの要素も複雑に関係して、多くの制限が存在することが指摘されているが、ここではこれ以上、近・現代語の用法には立ち入らないことにする^(註11)。

このように、近・現代語でも複雑な動きをみせるこの現象が、中世語イスパニア語ではどのような現れ方をしていたか、それを上述の四文献を中心にみてみよう。

3. 調査文献中の具体例

以下に調査対象とした四文献中、関連する現象がどのような使用分布を呈するかを、いくつかの場合に分けて示してみよう。

3.1. 副詞的不定詞節

- (14) aprendemos que por *tu matar* aquestos sabios, otros aura y luego en Cordoua. (Alfonso, 97)
- (15) e mesuraron que alguna natura de mahestria deuie y auer pora *fazer los omnes* al de uestir. (Id., 143)
- (16) ca non es casamiento sin *él e ella otorgar*. (Zifar, 110)
- (17) Que solo por *ser* de amores *estas razones*, (...), las hauías de escuchar con gana. (Celestina I, 210)

上記の四例は、前述の現代語の場合の文(11)に該当するが、これについて簡単な分析をおこなえば、次のようなことがいえる。

A) この不定詞節は主動詞に前置も後置も出来る。

B) 不定詞の主語は語彙的名詞であっても人称代名詞であっても構わない。

C) 主語は動詞に前置も後置も出来る。

D) 人称代名詞の形態に基づいていえば、主語には主格が認められる。

但し、上記の四例からは、主語が人称代名詞の場合には不定詞節の動詞に前置され、語彙的名詞の場合には節中の動詞に後置される、とも読めるので、調査した範囲内でこの主語の文法範疇の違いが動詞への前置、後置の現象と関係があるかどうかをみると、以下のような結果が得られた。ここからは断定的な推論を下しにくい、少なくとも副詞的不定詞節においては、語彙的名詞が主語の場合その節中の動詞への前置には何らかの抵抗があった、といえるであろう。

いまひとつ傾向的なものとしては、このような文法的な環境では、その節中の主語には人称代名詞が語彙的名詞よりも、わずかながら、多く現れてきていることが窺えるが、これは、単なる頻度数の問題、と考えておいていいと思われる。

3.2. 副詞的不定詞節の内部での主語の位置

Alf.	主語	動詞に	前置/後置
	語彙的名詞	前置/後置：0/3	
	人称代名詞	前置/後置：1/1	(1/4)
Zif.	語彙的名詞	前置/後置：0/3	
	人称代名詞	前置/後置：2/1	(2/4)
Corb.	語彙的名詞	前置/後置：0/2	
	人称代名詞	前置/後置：1/0	(1/2)
Cel.	語彙的名詞	前置/後置：1/3	
	人称代名詞	前置/後置：1/6	(2/9)

3.3. 名詞的用法

A) 主語となる場合

- (18) ca non enpesce *provar ome* las cosas sinon si la proeba es mala.
(Zifar, 131)
- (19) e por todo esto alcançar, conviene *el onbre* mucho *guardar*. (Corbacho, 55)
- (20) Que conoscer el tiempo e *vsar el hombre* de la oportunitydad hace los hombres prósperos. (Celestina I, 65)
- (21) *Saberlo nuestro amo* es echalla por quien es e no curar della. (Id., II, 26)

B) 不定詞構文「ser + 名詞/形容詞 + 不定詞」の主語となる場合・

- (22) Grand cosa fue, Eneas, d'*una muger poder se deffender* contra tantos enemigos (Alfonso, 86)
- (23) Costumbre era a aquella sazon de *criar se los donzelles y las donzelas* ... en el palacio del rey. (Id., 106)
- (24) non es menester de *nos detener* de non enbiar por él. (Zifar, 91)
- (25) ca sería cosa desaguisada e muy sin razon *ir yo* de cavallo e vos de pie ... (Id., 82)
- (26) que es un pecado muy terrible *la persona non conoscer* a sý, nin a su fallimiento. (Corbacho, 132)

C) 直接補語となる場合

- (27) Et considerado *las cosas de esta vida ser corrompibres* et menos preciando las, propuso de servir a Dios. (LLEM., 216)
- (28) E aun la yglesia nunca le permite *ser dados beneficios* sy primeramente no es por el papa legitymado ... (Cordacho, 70)
- (29) ¿Más prouecho quieres, boua, que *complir hombre* sus deseos? (Celestina I, 159)
- (30) si vosotros buenos enamorados haués sido, juzgarés *yo dezir* verdad. (Celestina II, 38)
- (31) que el dulce sonido de tu habla, (...), me certifica *ser tú* mi señora Melibea. (Id., 82)

D) 名詞の同格節になる場合

- (32) con cuita e con reçelo que tenía en mi corazón de *ser vencidos aquellos cavalleros* que por mi fueron contra los de la hueste, e *yo ser presa* e cativa e mio fijuelo eso mesmo. (Zifar, 102)

E) 前置詞の補語になる場合

- (33) E si as uerguença de *seer yo* tu mugier linda, ten me por barragana (Alfonso, 88)
- (34) ca ora es de *vos tornar*. (Zifar, 113)
- (35) el desordenado amor es causa *del marido separarse* de la muger e la muger del marido. (Corbacho, 69)
- (36) ¡No es tiempo de *yo biuir*! (Celestina II, 186)
- (37) ¿Qué dolor puede ser, que ygualle con *ver yo* el tuyo? (Id., 189)

F) 独立的用法

- (38) *La muger ser* murmurante e detractadora, regla general es dello. (Corbacho, 129)
- (39) *Seer la muger* tomadora, usurpadora, (...), poner en ello dubda sería grand pecado. (Id., 132)

3.4. 前記の A) — F) についてのいくつかの観察

上記3.1.で副詞的不定詞節について指摘した現象が、名詞的用法の不定詞節の場合にもみられる。つまり、不定詞節の動詞の主語は語彙的名詞の場合も人称代名詞の場合もあり、それは節の動詞に前置されることも後置されることもあり、かつまた、そこに現れる人称代名詞は常に主格の形態をとること、である。

4. 叙実型動詞

4.1. 再度ここで、これらの中世語の示す現象について、以下のような確認をおこなっておきたい。

A) 用例に基づけば、それ独自の主語を伴う不定詞節の使用は近・現代語に比べてはるかに多かった。

B) 不定詞節中の主語の動詞に対する位置は、それが語彙的名詞か人称代名詞かを問わず、動詞に先行することもあった。

C) 特に、近・現代語では「QUE + 動詞定形」の従属節しか認めない動詞の直接補語に、主語を伴う不定詞節が相当頻繁に用いられた。

D) C)の場合のみならず、近・現代語では文法的には非適格文と見なされるような文構造にこの主語を伴う不定詞節が使われた。

4.2. 上記 4.1. についてのコメント

A) 中世イスパニア語では、不定詞節が組み込まれる上位文中に、不定詞節の動詞の主語に当たる要素が存在しない場合、つまり、上位文中の主語か直接補語、間接補語のいずれかと不定詞節の主語との間に同一指示関係が成立しない場合、不定詞節はそれ独自の主語を動詞の前あるいは後に置くことが出来た。このようにして不定詞節がその主語を表示するとき、その主語が形態的に格表示の出来る人称代名詞の場合には、動詞の前後いずれであっても、不定詞の主語を明示するという目的は十分に達成されている、といえよう。

B) しかし、主語が語彙的名詞のときにも同じようにその位置に制限が無かったのはなぜか。一般的な傾向として中世語でも、不定詞節の主語の位置は動詞の後、といえる気配を強めつつあるので、このような傾向に反して動詞に前置される不定詞節の主語の存在は、特別な場合として説明が必要となるだろう。

ここでこの不定詞節の主語の位置を分析するための一つの基準が考えられる。主語の文法範疇に依ってこれを整理するとすれば、次のような提案が出来るかもしれない。

不定詞節がそれ独自の主語をとるとき、(I)それが名詞のときには動詞の後に、(II)それが代名詞のときには名詞の前に、置くと。この原則は、次の(40)と(41)のような場合に対する説明としても効果的であろうと考えられる。しかし、残念なことに、(42)のような反対例がすぐに出てきてしまう。

(40) que la distancia de las moradas no despega el querer *de los coraçones*.
(Celestina I, 162)

(41) fuye los deshonestos logares (...) e las personas que tú sabes e

- puedes entender que son causa de *tu* enduzir a pecar. (Corbacho, 71)
 (42) *La mujer ser desobediente dubda no es dello* (Id. 150)

C) 近・現代語では、不定詞節では動詞の主語はそれに後置されるものとする。つまり、不定詞には本来的に、動詞に付与されるべき [屈折] 素性が与えられていないので、主語となるべき [代] 名詞は、動詞が指定する主語の位置—動詞の前—を占めることが出来ない。そこで、通常は、これが上位文の主語にあるいは補語に投射されて削除されてしまう。しかし、このような上位文の特定要素との間に同一指示関係が設定されない場合には、この主語を動詞に後置してこれを主語に指定する、という手続きによって不定詞節独自の主語が決定される、と説明されている^(註12)。

しかしながら、これまでみてきているように、中世イスパニア語では、小数派ながら、不定詞節の主語は動詞に前置される場合もあって (*Todas las cosas ser criadas a manera de contienda o batalla, dize aquel gran sabio Eráclito. Celestina I, 15*), こうした現象をみるかぎり、不定詞節で動詞の前にある名詞には主語の資格が与えられている、といわざるをえないのである。これは、「動作の主体としての主語 + 動詞」という基本的な構造が、何の修正も受けずにそのままに表出したものか、それとも、原初イスパニア語に不定詞が人称屈折を帯びた段階があって、これがその形態的特徴を失った後にもその名残を留めた結果の現象、というべきなのであろうか。近・現代語では不定詞節が独自の主語をもつ場合、通常は、その位置は動詞に後置、しか認められていないのである。

- (43) Aseguró que *el presidente* permance allí.

- (44) Aseguró permanecer allí *el presidente*. ^(註13)

4.3. 直接補語に用いられる主語を伴う不定詞節の場合

上記 3.3. C) に挙げた不定詞節の現象を「認識・発言・出来事」を意味する動詞の補語の場合に現れる現象として、これら特殊な意味グループの動詞の働きと関係付けて、説明しようとする試みがあることも見逃してはならない。これらの動詞は、その一部が現代語文法でいわれる叙実型動詞

(verbo factivo) と重なり合うものと思われるが、早くからイスパニア語文法でも、このタイプの動詞が主動詞の場合、その補足文には主語を伴う不定詞節も現れることがあるといわれてきた。この現象は現代語にも残っていて、例えば、“La hija del presidente cubano, que *dijo encontrarse exhausta, pero muy contenta*, habló el jueves...” (*El País*, 27 - XII - 1993) のような場合にもみられるが、これはどちらかといえば、小数派のようである。しかしながらこれは主動詞と不定詞節の主語との間に同一指示関係が成立する場合だが、両者に同一指示関係が存在しないときにも、“Este documento prueba haber tú nacido en 1938.”^(註14) のように、独自の主語をもつ不定詞節が直接補語として使われるようである。

さて、中世カスティリア語においては、上記 3.3. C) に示したようになり積極的に、この独自の主語を明示した不定詞節が、特定の意味グループの動詞の直接補語に使われたといえる。これは次のような記述からも確認される。

Pero en la [lengua] antigua era posible el infinitivo con distintos sujetos: a) Con algunos verbos de entendimiento y lengua: “El dulce sonido me *certifica ser tú* mi señora Melibea” *Celestina*, XII. (...). b) Con verbos de acontecimiento ... (V. García de Diego)^(註15)

ここには、probar, saber, conocer, pretender, certificar, afirmar; acaecer, acontecer などを主動詞とする場合の用例が挙げられ、近代語においても教養語形式として、creer (*Creo ser verdad esto*), participar; acaecer, acontecer (*Les aconteció salir de paseo y hablarle*) などの動詞にこの種の不定詞構文が現れる、との記述がなされている。

もちろんのこと中世語でも、すでに 3.3. A), B), C) などの不定詞構文に対して、「QUE + 動詞定形」による平行形式があるのは、いうまでもない。すると、なぜこの種の動詞にかぎって二種の構造が認められるのか、それについての答えは与えられていないようである。

(45) e connoci *que* era mio marido *que* me dixo en uoz delgada. (Alfonso, 85)

- (46) Por Dios, señora, mejor es *que* el uno sufra el pesar que muchos.
(Zifar, 63)

しかしながら、主動詞が *querer*, *desear* のような「希望・願望」を意味する動詞の場合には、少なくとも調査した範囲内では主語を伴う不定詞節の補足文はみられなかった。遡って、ラテン語をみれば、「発言・認識」、「知覚・確認」、「感情」などの動詞を、また *fama est*, *certum est* などの動詞句を、主動詞とする二重対格による不定詞文が存在し、この形式の中で *velle* (= *querer*) も、次の(61)に見られるように、その主語が上位文の主語とは異なる場合であっても、不定詞構文が可能であったといわれる。こうした事実を重ね合わせると、ここで問題としている主語を伴う不定詞節の存在は、このラテン語の統語法の一部を継承したものとはいえ、その受け継ぎ方は部分的であり、ここにイスパニア語としての特徴がみえてくる、といえよう。

- (47) e non quiso Dios *que* muriesse a manos de mio hermano (Alfonso, 85)
(48) Dico *me venire*.
(49) Uolebam *te venire*.
(50) Uxor invicti Iovis *esse* nescis (=no sabes ser [ella] la esposa del Júpiter Invencible) (註16)
(51) Despero *fieri* mater (=Desespero convertirse [ella] en madre).

4.4. 前項で挙げた特定の意味グループの動詞とその補足文の構造との関係を、早くからイスパニア語文法の特徴として指摘したのが Eduardo Benot であった。彼は動詞をその意味に従い分類し、現代語文法でいう「叙実型動詞」に近い意味の枠を設定し、これを、*verbos de entendimiento* (認識型動詞) と名付けた。彼はこの枠の中に含まれるものとして、*pensar*, *recelar*, *asegurar*, *olvidar*, *saber*, *juzgar*, *sostener*, *manifestar*, *suponer*, *imaginar*, *jurar*, *predecir*, *insinuar*, *creer*, *prometer*, *prever*, *sospechar*, *afirmar*, *deducir*, *confesar* のような動詞を挙げている。彼は続けて、これらの動詞はその主語と補足節の主語とが同一の場合と両者が

異なる場合との、二つの意味の関係を設定しうることを指摘し、文構造としては、前者の補足節は不定詞節の形をとり、後者では「QUE + 文」が現れるという。これは全くの基本的な原則を述べたにすぎないが、それに加えて、二つの主語が異なる場合にも、特定の条件下では不定詞節を用いることが可能であるとし、次のように述べている。

Aun habiendo dos nominativos, la entidad acusativo de los verbos de entendimiento puede ser una frase construida con infinitivo, siempre que el acusativo no se refiera a hechos evidentemente futuros, lo que no ocurre con los verbos de pasión ni con los de voluntad.

Ejemplos de acusativos-frase construidos con infinitivo, aun habiendo dos agentes:

El cabrero *insinuó* haber estado allí la guardia civil.

El cajero *recelaba* haber sido estafado por su cobrador.

El guarda *confiesa* tener su amo diez fusiles ocultos en el cortijo. (註17)

E. Benot はまたこの「認識型動詞」の意味的特徴について次のように述べ、このグループに属する動詞とその補足節の意味内容との特殊な依存関係にも言及する。

Los verbos de entendimiento, en la gran mayoría de los casos, se refieren a lo ya ocurrido, y por lo tanto, las oraciones que los acompañan van en pretérito o en presente. (註18)

ここに挙げた観察・分析は、補足節によって表される内容が真であることを話し手が前提としていること、この内容の具体的な現れとして、上記の動詞は完了形などの相や特殊な時の副詞と共に起できる、ことなど、「叙述型動詞」の存在がスペイン語文法では早くから感知されていたことを証明する重要な事実となるであろう。

さていまここで、中世語に現れた独自の主語をとる不定詞節の用法をみると、これは E. Benot や V. García de Diego が指摘した直接補語の場合だけでなく、文の主語から独立的な場合まで、問題の不定詞節がかなり

幅広く使われていることが分かる。しかしながら、問題はこのような統語論上の現象にとどまらず、この種の不定詞節に従える動詞やそれと共に現れる述部は、E. Benot のいう「認識型動詞」や「認識型述部」- *es costumbre / aver uerguença de / ...* - 以外に、それに加えて「意志作用型動詞・述部」- *convenir / es menester / es ora de / ...* といえる場合、もあることが明らかになる。これ以外にも、こうした特殊な意味範疇に属する主動詞や述部とは無関係に現れてきている場合もあり、これら諸点を考慮すると、「認識型動詞・述部」と「独自の主語をもつ不定詞」との間に、意味のうえで絶対的な依存関係がある、と断定することは不可能になってしまう。

4.5. さてこれまでみてきたように、中世イスパニア語では平行的に「[que + 文]」の補足節があるのに、主語を伴う不定詞節が上位文の主語、直接補語、その他の補語として使われている。一般論としては、不定詞は本来的には上位文の動詞の時間と同時にあるいはこれに後続する時を示すとされる。ここから、不定詞には、「動作・状態の未実現」という意味的特徴が与えられるが、不定詞節がそれ独自の主語を伴い上位文に組み込まれている 3.3. A) - F) のような場合の多くは、不定詞節に与えられた時が、上位文の動詞の時と同時にあるいはそれに先行するもの、と解釈することが出来る。しかしながら、小数派ではあるが、明らかに不定詞本来の「時」、つまり主動詞の「時」と同時にこれよりも後を意味するものとして現れてくる事例もあり、またこの「時」の表示があまり積極的でない場合も存在している。このような小数派的現象をも含めて現象全体を分析・解釈出来るような説明が望まれるのである。

まずは、「認識・言明・出来事」の動詞あるいはこれらと同一の意味範疇にあると考えられる述部と共起関係にある不定詞は、通常、それが意味する動作・状態が「既実現」として解釈されるということである。これは不定詞に、本来の不定詞がもつ意味的特徴とは矛盾する例外的な「時」を認めることになる。すると、小数派として存在する「妥当・必要性」の動詞や、またこれらと同一の意味範疇の述部と共起する不定詞は、どのように解釈されるのであろうか。

さて、この種の不定詞節の意味を検討してみると、そこに盛り込まれている内容は、一般論的事実やこれに近い概念を表していることが多いとい

える。もしこの観察が正しいとすれば、この形式をとって現れる不定詞が意味する動作・状態が〔(実現されるべきものとして)先取り〕されている、と解釈していいのではないだろうか。また、この不定詞節中の主語には頻繁に非人称代名詞 *om[n]e* が使われるが、これはそのような不定詞節がもつ特殊な意味を補強する要素と見做すことが出来ないだろうか。また、ここでは純然たる意志作用の動詞、つまり「希望・願望・命令」の意味をもつ動詞やそれと同じ意味範疇の述部と共に、このタイプの不定詞節が使われる事例を見い出しえなかった。これは、少なくとも、「妥当性」の意味を表す動詞 *convenir*、「必要性」の意味を表す名詞 *menester* などには「価値判断」的な意味解釈が許されるが、前者においてはこの意味の領域での解釈は許されない、ということを示すことにもなるといえよう。このような意味の作用を受けて、本来の不定詞のもつ意味的特徴に矛盾するような例外的な「時」を、不定詞が帯びていることを明示化するための統語上の手段として、「独自の主語を伴う不定詞節」があったとすれば、この形式は「有標項」に位置付けられ、これに対して一般的に用いられる「Que + 文」の形式は無標項となるだろう。ただ、この不定詞節中の動詞に対する主語の位置が、この特殊な意味形成にどのように係わりあっていたのか、これについては残念ながら説明できないままである。

5. 暫定的まとめ

中世イスパニア語には、不定詞にいくつかの統語上の特殊な現象があった。

そのうちの一つは、直接補語として用いられる「de + 不定詞」で、これは「que + 直説法 / 接続法」と相補的な場にあったが、この「de + 不定詞」の形式は、17世紀に入るとその使用が激減し、不定詞が単独で他動詞の直接補語として現れ、不定詞節を補足節に位置付ける働きを担うと考えられる前置詞「DE」の使用は、除々に後退してゆく。

中世語のもう一つの特徴は、主語を伴う不定詞節が近代語、現代語よりもお頻繁に用いられたこと、またこの節中の主語の位置が動詞の前後のどちらも認められていたという事実である。しかしこの現象も、17世紀初頭の Cervantes では、すでに特殊な構造—たとえば、以下に示す抽出用例中の 14), 18) などの場合—を除いては、主語が動詞に後置という点で統

一されてしまっている。

上記の二点として挙げた統語論上の変化は、中世イスパニア語から近・現代イスパニア語への推移の過程で生じた、体系内の変化の一部を示すものと考えられ、この推移の状況は、以下に参考のために掲げる抽出用例からも確認されるのである。特に、15世紀末のカスティリア語と17世紀初頭のそれとを代表する二つの文献が示す統語事実の差は、この意味においても重要視しなければならないであろう。

6. 抽出用例

Celestina I

- 1) (...), cuya juventud de amor *ser presa* se me representa aver visto y y dél cruelmente lastimada, a causa de le *faltar* defensiuas armas para resistir sus fuegos ... (4)
- 2) Todas las cosas *ser criadas* a manera de contienda o batalla, dize aquel gran sabio Eráclito ... (15)
- 3) Pues no menos dissensiones naturales creemos *aver* en los pescados. (20)
- 4) pues es cosa cierta *gozar* la mar de tantas formas de peces, quantas la tierra y el ayre cría de aves e animalias e muchas más. (20)
- 5) bien affirmaremos *ser* todas las cosas criadas a manera de contienda. (21)
- 6) De una ave llamada rocho, (...), se dize *ser* de grandeza jamás oyda é que lleva sobre su pico fasta las nuues ... (22)
- 7) Que el comienço de la salud es *conoscer* hombre la dolencia del enfermo (42)
- 8) Torpe cosa es *mentir* el que enseña a otro ... (43)
- 9) Porque aquellos procuraron abominable vso con los ángeles no conocidos é tú con el que confiesas *ser* Dios. (44)
- 10) Miserable cosa es pensar *ser* maestro el que nunca fue discípulo. (52)
- 11) peor extremo es *dexarse* hombre caer de su merescimiento, que ponerse en más alto lugar que deue. (52)

- 12) Aquella proporción, (...), no sin duda por el bulto de fuera juzgo incomparablemente *ser* mejor, que la que París juzgó entre las tres Deesas. (56)
- 13) Que *conoscer* el tiempo é vsar el hombre de la oportunidad hace los hombres prósperos. (65)
- 14) Por *huyr* hombre de vn peligro, cae en otro mayor. Por *encubrir* yo este fecho de Pármeno, (...) cay en indignación desta... (67)
- 15) La primera [conclusión], que es forçoso el hombre *amar* a la muger e la muger al hombre. (94)
- 16) no me parece buen consejo *quedar* yo acompañado e que vaya sola aquella... (115)
- 17) el primer escalón de locura es creerse *ser* sciente. (122)
- 18) Conocerás mis agras palabras *ser* mejores para matar este fuerte cáncere... (123)
- 19) es común condición humana que lo que mucho se desea jamás se piensa *ver* concluydo. (141)
- 20) *arrimarse* el hombre al más sano, es discreción. (156)
- 21) ¿Más provecho quieres, boua, que *complir* hombre sus deseos? (159)
- 22) ¿Dexar a mí triste por alegrar a él e *llevar* tú el provecho de mi perdición, el galardón de mi yerro? (178)
- 23) Cata que todo esto nouedad es para se *marauillar* quien te conoce. (196)
- 24) Que solo por *ser* de amores estas razones, avnque mentiras, las hauías de escuchar con gana. (210)
- 25) Porque sin *contrariar* ninguna, todas concedieran e vivieran conformes en que la lleuara Melibea. (227)

Celetina II

- 1) No dudo ya tu confederación con nosotros *ser* la que deue. (16)
- 2) *Saberlo* nuestro amo es echalla por quien es e no cura della. (26)
- 3) (...), no juzgues la bondad e hermosura de Melibea por esso *ser* la que afirmas. (34)

- 4) si vosotros buenos enamorados haués sido, juzgarés yo *dezir* verdad. (38)
- 5) Marauillada estoy *sentirse* del corazón muger tan moça. (49)
- 6) Gran parte de la salud es dessearla, por lo qual creo menos peligroso *ser* tu dolor. (53)
- 7) no tengas por nueuo *ser* más fuerte de sufrir al herido la ardiente trementina e los ásperos puntos, (...) que no la primera lisió. (56)
- 8) te doy mi fe *ser* segura e, si siento aliuio, bien galardonada (57)
- 9) Por amor mío, hija, que si acá tornare [ella] sin *verla* yo, que no ayas por bien su venida ni la recibas con plazer. (65)
- 10) pues no era más menester para me llevar muerto a nuestra casa, que *boluerse* ella por mi mala prouidencia. (78)
- 11) E, más, avn no somos muy ciertos *dezir* verdad la vieja. (79)
- 12) que el dulce sonido de tu habla, (...), me certifica *ser* tú mi señora Melibea. (83)
- 13) E vería él los cielos abiertos en *tornalle* yo a hablar e mandar. (141)
- 14) No quiero marido, no quiero ensuziar los ñudos del matrimonio, ni las maritales pisadas de ageno hombre *repisar*, como muchas hallo en los libros... (148)
- 15) Y después vn mes ha, como has visto, que jamás noche ha faltado sin *ser* nuestro huerto escalonado como fortaleza e muchas auer venido en balde (150)
- 16) Más deseo ya la noche por tenerte contenta, que tú por *verte* vengada. (169)
- 17) ¡No es tiempo de yo biuir! ¿Cómo no gozé más del gozo? (186)
- 18) ¿Qué dolor puede ser, que yguale con *ver* yo el tuyo? (189)
- 19) Hija mía Melibea, ¿qué hazes sola? ¿Qué es tu voluntad *dezirme*? (194)

Cervantes (*Novelas ejemplares*) (註19)

- 1) que le parecía *ver* en él los que suelen pintar de los angeles (58)

- 2) mas porque oyeron el son de un arpa, creyeron *ser* verdad la música (62)
- 3) Por *venir* el día, se fueron los músicos... (64)
- 4) que quisiera no *anochecer* en la posada, sino partirse luego para sus almadrabas. (65)
- 5) y por *haberse quebrado* los cántaros se derramó también el agua... (69)
- 6) no será bien que por *saberla* muchos se menosprecie. (92)
- 7) No entiendo lo que decís, (...), en eso de *ser* y *no ser* vuestra criada la fregona. (102)
- 8) por las cuales letras vio *ser* forzoso que se juntasen ... (109)
- 9) y hallaron *ser* las señas verdaderas (114)
- 10) sin que le hubiera descubierto *ser* tan principal como era siendo su hija. (118)
- 11) Agradeció Leocadia a Teodosia, que ella pensaba *ser* Teodoro, sus muchos ofrecimientos (148)
- 12) y la herida que tenía era peligrosa, por ser en la sien izquierda y *decir* el cirujano *ser* de peligro ... (154)
- 13) no os ha llevado (...) de la memoria la imagen de aquella que poco tiempo ha que vos decíades *ser* vuestra gloria y vuestro cielo (156)
- 14) y vio al que pensaba *ser* hermano de don Rafael en brazos del que tenía por su esposo (159)
- 15) de su natural condición nació hacer aquellas obras (...) a todos los que conocía o imaginaba *ser* hidalgos castellanos. (164)
- 16) ya recogéndolo con tanta destreza que daban bien a entender *ser* maestros en aquel ejercicio. (165)
- 17) al volver el rostro conoció don Rafael *ser* su padre, y Marco Antonio conoció que el otro era el suyo. (165)
- 18) estaba abrazando con el que pensaban *ser* peregrino. (166)
- 19) Los paños en que venía envuelta mostraban *ser* de ricos padres nacida. (175)
- 20) llegándose cerca conocí *ser* mujer en el hábito largo... (178)
- 21) Aquí acabaron de conocer *ser* gente principal la de la pendencia. (180)

- 22) Si no sucediera *venir* el duque de Ferrara a ser padrino de unas bodas de una prima mía ... (185)
- 23) os teníamos compasión y lástima por *ser* mujer ... (187)
- 24) *Ser* esta verdad tan notoria servirá de disculpa del *alabarme* yo propio. (192)
- 25) *Ser* yo honrado y ella muchacha y hermosa me hacían andar solícito en guardarla. (192)
- 26) Esto yo no lo creo, por *ser* desigual el matrimonio en cuanto a los bienes de fortuna... (192)
- 27) y esto no sólo por ser español, sino por ser caballero y *serlo* vos tan principiapl, como habéis dicho. (193)
- 28) La ida de Ferrara no se excusa, ni el dejar de *ayudar* yo a vuestro hermano, tampoco. (195)
- 29) y con tantas muestras de temor que le pareció *ser* todo verdad lo que decía... (198)
- 30) De modo, señor, cuando Cornelia y vuestro hijo pareciesen, no negaréis *ser* vuestra esposa y él vuestro hijo. (203)
- 31) casi les pedían albricias de *haber parecido* Cornelia y su hijo... (205)
- 32) Fuele respondido *ser* el duque de Ferrara, con que quedó más confuso... (205)
- 33) ¿Es cosa nueva *dormir* una mujer con un paje ... ? (209)
- 34) era posible *saberse* la cuasa de su melancolía ... (212)
- 35) dio cuenta Cornelia de todo lo que había sucedido hasta *venir* a aquella casa por consejo del ama ... (215)
- 36) entre todos se dio traza que aquellos desposorios estuviesen secretos hasta *ver* en qué paraba la enfermedad ... (218)
- 37) Por sola la palabra chorizos, se persuadieron los oyentes *ser* el que las alabanzas decía extremeño sin duda ... (354)
- 38) sino pasó adelante, por no *parecer* a sus ministros, corchetes y porqueros aquella feria de ganancia. (356)

註記

- (1) Real Academia Española, *Esbozo* (1973); §. 3. 16. 4. e), pág. 486. なおその他の文献も不定詞の主語の位置については「それに後置」で一致している。Andrés Bello (1981), §. 1130, pág. 659. ただ, S. Gili Gaya (1985) は「不定詞の主語はそれに後置されるが, 前置も可能である」として, *Por yo no saber nada me sorprendieron* の例を挙げている (§. 143, pág. 189)。これを評して Manuel Seco (1987) は, *El ejemplo que cita Gili de sujeto antepuesto es raro* (pág. 231), といっている。
- (2) *Esbozo* (1973); §. 3.16.10. a); pág. 492.
- (3) *Id.*, §. 3.16.17 a); pág. 498.
- (4) Federico Hanssen (1966), §. 616; pág. 256.
- (5) María Moliner (1971), pág. 1467.
- (6) Gonzalo de Berceo, *Martirio de San Lorenzo*, edición de A. M. Ramoneda, Clásicos Castalia, No. 96, Madrid, 1980, pág. 246.
- (7) Arcipreste de Hita, *Libro de buen amor*, edición de G. B. Gybbon-Monypenny, Clásicos Castalia, No. 161, Madrid, 1990, pág. 140.
- (8) F. González Ollé, *Lengua y literatura españolas medievales*, Ariel, Barcelona, 1980, pág. 415.
- (9) Mauricio Molho, *Sistemática del verbo español*, I, II, Gredos, Madrid, 1975, pág. 724.
- (10) Manuel Seco, *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*, novena edición renovada, Espasa-Calpe, Madrid, 1987, pág. 231.
- (11) 例えば, 山口 (1990) は「線の順序」として, 主語不定詞節の使用に特殊な制限がみられることを指摘している (pág. 223)。
- (12) M. L. Hernanz y J. M. Brucart (1978), pág. 122; 山口 (1990), pág. 220.
- (13) Eduardo Benot (1953), pág. 278.
- (14) *Esbozo* (1971), pág. 486.
- (15) Vicente García de Diego (1981), pág. 355.
- (16) M. Bassols de Climent (1963) II, §. 225, pág. 229. 次の(51)もその出典は同じ。
なお, この二文においては, *uxor*, *mater* とそれぞれに主格が用いられているが, 伝統的なラテン語文法に立てば, *uxorem*, *matrem* となる対格が望ましい形とされる。しかし, ここで対格に代えて主格が用いられていることは, 俗ラテン語にみられる対格の機能拡大を考えた場合に, 一般的傾向に逆行する現象ともいえるわけで, この点はどのように解釈すべきなのであろうか。
- (17) Eduardo Benot (1953), págs. 267-269. Benot はここでは, 動詞とその直接補語に立つ補足節との関係を扱っている。この目的で, 彼は動詞に *verbos de pasión*, *verbos de voluntad* と *verbos de entendimiento* という意味の下位区分を設定し, それぞれの区分の動詞によって, その補足節にどのような構造上の差が現れるかを指摘しようとしている。なお, 本文中の *verbos de entendimiento* のリストは, Benot が示した順序に従っている (pág. 267)。
- (18) *Id.*, pág. 274. なお現代語の場合, *Creía tener razón* と *Creo tener razón* との間では, 不定詞節の表す意味内容に差があると考えられている (R. Cano Aguilar, 1981, pág. 185)。また, *Esbozo* (1973) は, *Admiten esta construcción los infinitivos de ser, estar y otros verbos intransitivos* (pág. 486) とも述べているが, これは,

独自の主語を伴う不定詞節が表す特殊な意味の現れ方として、考察に値する現象であろうと思われる。

- (19) Miguel de Cervantes, *Novelas ejemplares*, III, edición de J. Bautista Avelar, Clásicos Castalia, No. 122, Madrid, 1982 をテキストとして, pp. 43-218の範囲でそこに現れた用例を抽出した。

(付記. 本稿は, 1993年6月27日に関西スペイン語研究会で行なった口頭発表の原稿を修正, 加筆したものである。発表時に寄せられた学兄諸氏からの貴重なコメントに感謝申し上げておきたい)

参 考 文 献

Bassols de Climent, Mariano: *sintaxis latina*, I. II, C.S.I.C., Madrid, 1963

Bello, Andrés, *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*, edición crítica de Ramón Trujillo, Inst. Univ. de Lingüística A.B., Tenerife, 1981.

Benot, Eduardo: *Arte de hablar*, Edit. Sopena, Argentina, Buenos Aires, 1953.

Cano Aguilar, Rafael: “Cambios en la construcción de los verbos en castellano medieval”, *Archivum*, XXVII-XXVIII (1977-78), pp. 335-379, Oviedo, 1978.

——— : *Estructuras sintácticas transitivas en el español actual*, Gredos, Madrid, 1981.

出口厚実: 「現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度」(1), (2), (3). 大阪外国語大学学報第70-1号(1985), 第71-1号(1985), 第72-1号(1986), 大阪, 1985, 1986.

Demonte, Violeta, *La subordinación sustantiva*, Cátedra, Madrid, 1982.

Feldman, David M.: *Apuntes históricos sobre las frases verbales de modo en español*, Edit. Playor, Madrid, 1974.

García de Diego, Vicente: *Gramática histórica española*, tercera edición corregida, Gredos, Madrid, 1981.

Gili Gaya, Samuel, *Curso superior de sintaxis española*, décima edición, Bibliograf, Barcelona, 1985.

González Javier, Elvira: “Sobre la extensión del infinitivo en el español antiguo”, *Anuario de Letras*, XXV (1978), pp. 151-156, México, 1987.

Hanssen, Federico: *Gramática histórica de la lengua castellana*, Presses du Marais, París, 1966.

Hernanz Carbó, María Luisa: *El infinitivo en español*, Departamento de Filología Hispánica de la Universidad Autónoma de Barcelona, 1982.

Hernanz, M.LL. y Brucart, J.M.: *La sintaxis*, Edit. Crítica, Barcelona, 1987.

Keniston, Hayward: *The Syntax of Castilian Prose*, The University of Chicago Press, Chicago, 1937.

Meyer-Lübke, Wilhelm: *Grammaire des langues romanes*, II, III, Laffitte Reprints, Marseille, 1974.

ランスロー, C, = アルノー, A: 『ポール・ロワイヤル文法』, 南館秀孝訳, 大修館書店, 東京, 1972.

Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1973.

Salvá, Vicente: *Gramática de la lengua castellana*, I, II, Arco/Libros, Madrid, 1988.

Seco, Manuel: *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*, novena edición renovada, Espasa-Calpe, Madrid, 1987.

山口忠志: 「スペイン語不定詞文について」『サビエンチア 英知大学論叢』第24号, 兵庫, 1990.

用例抽出テキスト

Obras de Alfonso X el Sabio, edición y notas de F.J. Díez de Revenga, Taurus, Madrid, 1985.

Libro del Caballero Zifar, edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, Madrid, 1982.

Alfonso Martínez de Toledo, *Arcipreste de Talavera o Corbacho*, edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, Madrid, 1970.

Fernando de Rojas, *La Celestina*, edición de J. Cejador y Frauca, I, II, Clásicos Castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1972.

Miguel de Cervantes, *Novelas ejemplares*, III, edición de J. Bautista Avallé-Arce, Clásicos Castalia, Madrid, 1982.